

ヨーロッパ、東と西と見たり聞いたり小さな旅

理学部化学科 中山重蔵

8月24日からの2週間強をヨーロッパで過ごした。2,3の大学のセミナーで講演させていただきまた第14回有機硫黄化学国際シンポジウム(ポーランド、ウッジ市)に出席した。この間に見たり聞いたりしたことを手記風に披露させていただく。

オランダ、ベルギーそして西ドイツ

正午に近いKLM航空の便で成田を発つと、同日の夕方5時にはアムステルダムに到着する。飛行機はシベリア、モスクワ上空を経て、12時間ほどでスキポール空港に下り立つ。2年前にもこの便を利用したが、日本人の乗務員が増え、機内サービスも向上していた。この路線の利用客の70%が日本人で、季節を問わずほぼ満席だそうである。値引き率が高いこと、北回りで直接ヨーロッパの玄関の一つと結ばれているためであろう。

当初オランダではナイメヘン(Nijmegen)大学のZwanenburg教授を訪う予定であったが、わけあって中止された。このためにできた空白の2日をアムステルダム市内の見学とレイデン(Leiden)大学訪問にあてた。翌朝手荷物をあずけたアムステルダム中央駅は、19世紀末に、赤煉瓦をもって立てられた巨大な建物で東京駅のモデルともなった。皇居の堀とアムステルダムの運河とをダブらせれば立地条件は似ている。市内の見どころ(アンネの家・レンブラントの家・王宮・花市場・のみ市など)は一日で見てまわれた。ただし、国立博物館・ゴッホ美術館・市美術館を堪能するには相当な時間を要する。今回は市美術館でセザンヌ、ピカソ、シャガールの作品にふれるにとどめた。ところで、この町を散策するには、自転車専用道路を歩かないこと(平坦なオランダは自転車天国である)、やたらと多いワン公の忘れ物を踏まないようにすることに結構神経をとられる。どちらにもしばしば冷や冷やさせられた。また、プ

レイ・スポットして有名な「飾り窓」の周辺では昼間から客引きのための最上等な日本語が飛びかうのには恐れ入りました。

夕方、アムステルダムから車で30分ほどのレイデンでおりた。この旅ではEURAIL PASSを利用した。ちなみに、イギリスを除くEC諸国の一等に15日間乗り放題のチケットが335米ドルである。レイデンではHotel Mayflowerに宿をとった。間口の狭い(昔の税制の名残りであろうか)、ややもすると見落してしまいそうなこのホテルのパステル調のインテリアはメルヘンチックで若い女性向きである。是非一泊(日本円で約8,000円)をおすすめしたい。

翌朝、レイデン大学を見学したのち、同大学の植物園を散策した。ここには、幕末の長崎へ、オランダ商館付きの医師として赴任し、高野長英、伊東玄朴らの蘭医を養成したシーボルトが日本から持ち帰った植物(フジ、アケビ、カエデなど)が植えられている。銀杏や榲も立派な大木に成長していた。この地を訪れた目的の一つは、国立民族博物館に所蔵されるシーボルトコレクションを核とする江戸末期の日本の文物を見ることであった。しかし生憎なことにこれらの品々は日本に貸出し中、聞けば今夏日本でシーボルト展が開催されたそうである。それでもこの国と最も関係の深かったインドネシアをはじめとする各国の民芸品に触れることができ、かつての全盛と東インド会社を核とする植民地政策の一端を垣間見ることができた。

28日に西独のダルムシュタット(Darmstadt)工科大学の化学教室で講演のため、27日はフランクフルトに泊り、翌朝ダルムシュタットの駅でHafner教授の出迎えを待つ約束になっていた。そこで、フランクフルトへの中継地としてブラッセルを選んだ。レイデンーブラッセル間は車で約4時間。ブラッセル中央駅には旅行案内所はな

かった。それは、駅より少し隔たった、スーツケースを押し歩くことのできない古い石畳の坂を下り、観光客の雑踏をくぐりぬけたところにあった。雑踏をさまようこと、1時間余、やっと案内所を見つけ、ホテルを予約することができた。この間、道をたずねた婦警は英語を話せなかった。案内所から、ホテルまでの道中も難儀をした。上野のアメ横さながらに雑踏した横町をいくつもくぐりぬけた。この間、ビクトル・ユーゴーが「世界一豪華な広場」とたたえ、ジャン・コクトーが「絢爛たる劇場」と表現したというグラン・プラス(Grand Place)にも迷い込んだか、それにゆっくりと目をやるゆとりはなかった。ブラッセルには、ミシュランのガイドブックが星のマークをつけたレストランがパリより多いそうである。その晩、張り込んで注文したフランス料理は、機械的に喉を通りすぎた。ゆっくりと味わうには疲れすぎていた。

ブラッセルからフランクフルトへは汽車で6時間弱(ケルン乗り換え)。フランクフルトでのホテル探しはブラッセルよりさらに難儀であった。駅の案内所のふとっちょのドイツ娘に、かつて宿泊したことのあるホテルへの斡旋を頼んだら、電話番号のみ教えて、自らは問い合わせしてくれない。マルクの持ち合せもないし、重いスーツケースをかかえていると言っても、どう気分を害したか自分でおやりなさいと言う。仕方なしに電話を入れたホテルはにべもなく“*We are full*”である。いささか逆上しながら急行で30分ほどのダルムシュタットまで行ってしまうことにした。しかし、生憎、この町の案内所は締まり、明晩のためにHafner先生が予約してくれたホテルも、そこで紹介してくれたホテルもoverbooking。仕方なし舞い戻ったフランクフルトでは20名に近い日本人客が血相を変え、ホテルの斡旋を頼んでいた。この時はじめて、この町で“*trade show*”が催され、これに参加する人々で、市内及び近郊のホテルが満員であることを知った。案内所は、急行で1時ほどのマンハイムまで行けば空室があるかもしれないという。汽車をのりついで夜露をしのぐことも考えな

がら到着したマンハイム。5時間かけてどうにかやわらかいベッドにありつけた。フランクフルトではしばしば見本市などが開催され、これにぶつかると予約なしでホテルをとるのが困難になること、どうかご注意を。

Hafner先生には教養部の町口先生のお世話で今春埼玉大学においていただき、立派な講演をしていただいた。その折、今回の訪問の話がまとまった。大学までのスケジュールは午前中がHafner教授との議論、昼食後4人の先生方との議論(個別に1人あたり30~40分)、コーヒープレイクのあと1時間ほどの講演、そして最後にレストランでの夕食であった。このスケジュールは人と話すのがあまり得意でない私にはきつかった(睡魔との戦いでもあった)。こうしたスケジュールは欧米の大学を訪問すれば大ていは組まれる。大いに議論し、情報を交換し、進歩・向上をはかろうとする精神こそ、真のhospitalityということであろう。Hafner先生は現在24名の学生を指導しておられ、その全員がPh.D.候補生とのこと。ドイツの化学会社がPh.D.取得者を優先的に採用することのあらわれであろう。教室の設備等の充実ぶりは垂涎的のしか言いようがないが、あまりにも多くの大学と学生をかかえた日本では、予算が分散してしまうため(文教予算の多寡はさておき)、こうした充実のぞめないのかもしれない。なお、グルムシュタットはLiebigの生誕の地として、またE. Merckの本社・工場があるところとしても有名である。

東独、ベルリンそしてポーランド

さて次の訪問先はベルリン工科大学のSteudel教授の研究室である。先生は無機化学者で硫黄がたくさん入った環状化合物の研究の第一人者である。西ベルリンへは、フランクフルトで乗り換え、東独のライプチヒ、ハレをぬけて汽車で6時間の旅である。東西ドイツの国境で乗務員が交替した。ここでパスポートの呈示が求められたにすぎず、他のEC諸国間の国境での儀式と何ら変るところなかった。ただ窓外の光景は一変した。路面はほころび、そこを走る車はまばら、旧式なそれに

変った。農場はやたら埃ばく豊穰の感を失った。戦前に建てられたであろう民家は、新に手を加えられた気配もなく寂寥としていた。時折、駐車場で見る自動車は東独自慢の2階建のそれに変った。ライプチヒ、ハレ付近の工場群のプラントからは錆がふきで、高い煙突からはき出される煙はどんよりとした青空にのみこまれていた。ただならぬ臭気に窓を閉める人もあらわれた。時々見かける小川は車窓からもそれがどぶに変質しているのがみてとれた。西ベルリンに入った時、窓外は再び明るさと活気を取り戻した。

ベルリン工科大学はZoo駅で降りてすぐのところ、東京で言えば銀座から徒歩10分たらずの地理的環境におかれていた。同大学でのスケジュールもダルムシュタットのそれと大差なかった。ただセミナーには東ベルリンのフンボルト大学の先生にもご参加いただいた。Steudel先生は巨大なマススペクトロメーターをご自分の研究室に持っておられ、このマシーンの精度は世界No.1であると誇らしげに語っておられた。これを利用して、不安定な環状ポリチオ化合物の錯体を巧みに同定しておられる。教授はドイツ統一後の課題は、東側によって投棄された産業廃棄物のクリーンアップとコミニュストの一扫であると語られた。東側工業地帯の汚染を見ればうなずける話である。また、東側の大学の研究室の設備は前世紀そのままであるとも話された。統一に異論を唱えることはなかったが東側に対する批判は辛辣であった。また、ダルムシュタットの若手の先生は、自分は統一に賛成であるがと前置きしながら、この問題に対する思い入れは世代によって大きく異なり複雑なものがあると語った。また、東側の著名な教授は私は統一に楽観的であり、研究環境の向上を期待している旨のことを述べられた。数日後に統一を向えるこの国の発展はいかようなスピードで進むのであろうか。

西ベルリンにはポーランドの人々が夥しい数のバスや乗用車を連れて買い出しにくる。これらの車は旧式そのもので、その廃ガスによる大気汚染が社会問題になっている。工科大学や動物園付近

には、こうした車がところ狭しとひしめいていた。工科大学は都心にあるため、排水等にはひときわ神経を使っていた。ドイツに入って知ったことであるが、環境問題のため、ハンブルグ大学の化学教室が閉鎖される。同大学のKrebs教授からも招待を受けたが、スケジュールがままならず、ハンブルグ訪問は断念せざるを得なかった。多忙の折、招いて下った同教授の労を思うと、悔やまれるばかりである。

筆者がこの旅で密かに楽しみにしていたものは、ベルリン壁そしてブランデンブルク門をくぐることであり、また東欧がいかなる変貌を遂げつつあるかを肌で実感することであった。工科大学でのセミナーの翌朝、3時間半コースのツアーバスに飛び乗った。3社ほどがツアーバスを仕立てており、その中には東ベルリンめぐりもあったが、いかんせん時間のゆとりがなかった。夢に見たベルリンの壁はあっけらからんとその姿をあらわした。東側に向かうバスの右手の壁は完全に撤去され、左手はほぼその全容を保っていた。壁近くには露店がたち、壁の石、使命を終えた東独のコインや国旗、はては東側の兵士のベルト、帽子、軍服まで売られていた。壁は高さ4m近く、厚さは10cm余といったところか。壁は20mほどの間隔で2重になっていた。のちに東側がもう一つつけたためである。東側の壁にも解放後に加えられたであろう無数の落書があった。所々がぐりぬかれ、太い鉄筋が不気味に露出していた。貸ハンマー屋もあり、あちこちで壁をたたき光景も見られた。私は壁の天辺にのぼり、壁をたたき少年から数片のかけらをもらい大事にバックにおさめた。

かつて東西ドイツ分断の象徴であったブランデンブルク門は10月3日の統一に向けて修復中であつた。門には無数の足場がかけられていた。12本のドーリア式の円柱に支えられたこの壮大な門も、この時心なしか小さく見えた。門近くには多くの露店が並び、観光客でにぎわっていた。東側の壁を背に立つ国境警備隊の衛兵の姿はない。修復中のブランデンブルク門をくぐることはできないが、周囲の壁はとりはられ、東と西の往き来

は全く自由である。私は東側に立ってスナップを一枚とってもらいこの場を去った。

次は有機硫黄化学国際シンポジウムが開催されウッジ(Lodz)に向けての出発である。ウッジはポーランドでワルシャワにつぐ人口第2位の都市で、ワルシャワから汽車で2時間ほど南西に下ったところに位置する。東ベルリンからワルシャワまで東側の飛行機が飛んでいるが、これを敬遠して汽車を利用したため、大変貴重な体験をした。2日ほど前に、予約の切符を買いに出たが、一等は売り切れ、二等しかとれなかった。幸い座席指定は得られた。ちなみに、ベルリンーワルシャワ間は11時間強、運賃は34マルク(約3,400円)であった(一等はこれより40%増)。早朝、朝食もぬいて乗り込んだ汽車は超満員であった。予約した座席のコンパートメントの網棚はすでに一部の間もなく荷物が置かれていた。仕方なしにスーツケースを通路に置いた。同じコンパートメントに乗り合せた18才のポーランド青年はひどく饒舌だが、とても親切であった(彼は英語が話せた)。通路のスーツケースが停車駅で窓から放り出されて持ち去られる恐れもあると足もとに入れてくれた。しかし、このためこのコンパートメントの住人は鋭角に折った足をスーツケースの上に置いて過ごす仕儀となった。途中からの込みようはさながら帰省ラッシュの新幹線であった。乗客全員が西ベルリンに買い出しにきたポーランド人なのであろう。みんながみんな大きな荷物をいくつもかかえている。トイレは行きたくとも行きようがない。このラッシュがいつ果てるのかを尋ねるとポズナニ(Poznan)までだという。ポズナニまで6時間もある。この間青年はひたすらしゃべり続けた。ポーランドは戦後の40年間をひたすら無駄にすごした、ワレサ(筆者にはヴァレンシャと聞こえた)にはまるで政策がない云々と。また、ワルシャワについたら話かける者があっても相手にするな、貴重品は肌身はなすな、自分がこの汽車を降りたあと居眠りをするな、ワルシャワ市内で一番背の高いビルがHotel Forumであるからそこに宿をとったらどうかとも話した。最後にポーランド紙

幣を取り出し、これで駅のKioskで地図を買ったらとお金をわたした。代りにマルク紙幣をわたそうとしたが多すぎると受取らなかった。ややあって数枚のマルクコインで妥協した。彼は西ベルリンの親類の家から帰るところであった。この青年も国境でポーランド警察による検札があった時には口をつぐみ神妙にしていた。またコンパートメントのポーランド人全員が軽く敬礼し、丁寧に敬礼ととれる言葉を述べていた。私はパスポートの呈示と所持する外貨の申請を行うだけですんだ。ポズナニを過ぎてようやく空間ができた。トイレに立とうとして驚いた。疲れ果てた人々が通路はおろか、トイレの入口、洗面所に至るまで寝こんでいる。これらの人々を跨いで歩く不気味さ、行きついたトイレの清潔さ、用をだしてコンパートメントに戻った時には疲れがどっとでてきた。

夕刻についたワルシャワ中央駅のプラットフォームでは早速“Taxi?”、“(Money) Exchange?”の聲がかかった。青年の言いつけ通り、まっすぐにHotel Forumをめざした。Forumの近くでおばあさんから声がかかった。“Forumは100ドル以上、私のところに泊れば15ドルだ”と言う。気の毒ながらこれを断って、この問答の最中にめざとく見つけたForumより安そうなそして私の身分に相応そうな向いのホテルに飛び込んだ。一泊44ドル、妥当な値だ。荷を部屋において早速ホテルのレストランで食事をした。朝目覚めてから今日口にしたものは二切れのパンとジュース一缶だけだ。食べ終えて給仕にマルクしか持ち合わせがないと言うと、チーフらしきとひそひそ相談したあと、10マルクだと言う。肉のメインディッシュにビールとコーヒー、妥当な額だ、ボラれてもいまい。言われるがままに支払った。そのうち、チーフらしきがでてきて、顔を耳までまっ赤にしながら“Money exchange?”と問いかける。迷ったあげく100マルク交換することにした。そっと手わたされたポーランド紙幣は50万ズローチを数えた。あとで知ったことであるが、食事の正当な値段は5マルク強、正当な交換レートでは60万ズローチ弱に戻るべきであった。ビールに上気しながら、

散歩をかねて駅にウッジまでの切符を買い出した時、さきほどのおばあさんが同じ場所で客引きをしていた。ホテルへの宿泊を断った時のおばあさんの恨めしそうな顔が未だ忘れられない。9月1日というに、この時戸外の温度は14度、すでに人々は分厚いコートで身をまもりはじめていた。

翌朝雨の中ウッジに向かった。139kmの距離が一等で約300円であった。車窓の光景はあくまでも平坦でのどかであった。始終風があたるらしく線路沿いに植えられた松の枝の張り具合はまるで広い大地が織り成した盆栽であった。途中で雨が上がり、色ずきかけた白樺の森に光が満ちた。ウッジでは運営にあたる方が出迎えてくれた。その晩歓迎のミキサーがシンポジウム会場で催された。

第14回を数えるこの会議は前はデンマークのオーデンセで、今回はポーランド科学アカデミーのMikolajczyk教授のお世話でこの地でひらかれた。次回はフランス、ノルマンディのカーン(Caen)の予定である。日本からは大饗(岡山理大)、岡崎(東大)、安藤(筑波大)、佐藤(岩手大)、小泉(富山医薬大)、時任(東大)、小野(日本ソーダ)の私を除いて8名の方々がされた。登録者が230名の小さな国際会議であった。会議では10のPlenary及びInvited Lectures, 60の一般講演、約100のポスター発表があった。発表の質は前回に比較して低下していた。東側で開催される会議の宿命かもしれない。この会議はヨーロッパの外に出してくれない。アメリカや日本では旅費がかさむというのがヨーロッパの方々言い分である。このため、日、米、カナダの研究者が中心となって始められたのが、ヘテロアトム化学の国際会議であると聞いている。

ポーランドは世界有数の硫黄の産出国である。単体硫黄を融解させてこしらえた、500gはゆうにあらう大会のシンボルマークをあしらったデコレーションが参加者全員にプレゼントされた。会議の流れはスムーズで、お世話もよく行き届いていた。この国の経済力を思うとき、会議運営にあられた方々のご苦労は大変なものがあったろう。

会議のExcursionでは楽聖ショパンの生家があるジェラソバ・ポーラに出かけた。生家は博物館になっており、ポートレート・楽譜などショパンを偲ぶ品々が展示されている。また、私共のためにピアノコンサートがひらかれた。周囲は緑の美しい公園になっているが、散策中ただならぬ臭いに眉をひそめた。臭気は公園を流れる墨を流したようにまっ黒なドブ川からやってきた。こんな田園にまで環境汚染が進んでいることに愕然とした。ポーランドの町を走る車は、現地生産の年季の入ったフィアットが主流であった。排ガス規制がまったくないのであろうか。車の往き来の多い交差点の空気の汚れはすさまじかった。タクシーのドアがカーブを切る拍子に開いたのにも驚かされた。

東欧諸国では日本語を学ぶ人が多いと聞いている。ウッジの駅に近いKioskでも日本語の教科書が売られていた。しかし、Kioskの窓には鉄格子がはまり、品物のやりとりは小さな窓口を通してしかできない。品物をじかに手にとることはできそうもない。町のマーケットに置かれた商品の数は少なかった。営業時間も限定されていた。客の数はまばらだった。やたら従業員の数だけが目立った。失業者を出さないためにもこうもしてはならないのか。ホテルのレストランのトイレでも若い女性が使用料を集めていた。インフレのせいであろうか、1989年度版のガイドブックに書かれた料金の20倍の使用料であった。帰国時のワルシャワ国際空港のうす汚れたトイレですらお金を集める女性の姿があった。トイレと言えば、ホテルのトイレにも日本のような吸湿性に優れたやわらかい紙はない。包装紙にでもなりそうなゴワゴワした紙が置かれている。幾重にも重ねなくても破れる心配はなく、それはそれでよいが、新聞紙の時代を経験したことのない若い人や神経質な方は、日本からあるいは西側のホテルから失敬して持って行くべきであろう。また、バスタブや洗面台の栓はないかあっても役に立たないことが多い。ゆっくりタブにつかりたかったら工夫が必要である。日本から用意したゴム栓は生憎なことに

フィットしてくれなかった。それでも窮するといろいろな知恵がわいて面白かった。ホテルのレストランの会議中の昼食その他の催し物にはあまるほどのご馳走がでた。ハイネッケン、ピルスナーなどのビール、外国のタバコもあった。食料は比較的良好流通しているように見えた。パンや肉を買うための長蛇の列を見ることが、モスクワのようにマールポロ一箱が3,000円もするような狂乱もなかった。

会議中Sulfur LettersとSulfur Reportsの晩餐会をかねた編集委員会が持たれた。前者は有機硫黄化学専門の速報誌、後者は二次情報誌である。筆者は近頃両誌のEditorial Board Memberに加えていただいた。また翌日には両誌とPhosphorus、Sulfur、and Silicon誌との合同編集委員会が昼食会をかねて開催された。後者はPhosphorus and Sulfurが時の流れに合わせて、誌名と内容変更を行ったものである。席上、ヨーロッパの委員の方々(英語を母国語としない)は、食事をしながらも、何の不自由もなく会議の流れを的確に把握しておられる。しかし私のごときは、全神経を集中していないと把握困難である。油断をして食事に手をつけているような時に、白羽の矢が立って意見を求められるようなこともある。幸い今回は同席された東大の岡崎先生にカバーしていただき、私は顔つなぎ程度で事なきを得た。論文を書くための英語力のみならず、こうした際の会話力の充実の必要性を身をもって知らされた次第である。

都合で全日程の終了をまたずに帰国した。帰途ワルシャワに宿泊したが、ここでも野次馬根性旺盛でワルシャワ大学をはじめ方々をかけめぐった。激動のこの時期にドイツそしてポーランドに入れたことは誠にありがたかった。それにしても、この旅で最後まで心に残ったものは、chemistryではなく、社会主義とは一体なんであったのかという強い問いかけであった。思えば人間は、そして強者は弱者に、戦後だけをとっても様々なことをしてきた。ソ連邦における民族独立の気運も、イ

ラクのクエート侵攻も、強者が弱者におしつけた気まぐれと無縁であるまい。平和な島国に住む我々もとくと考えて見るべき問題である。

この旅では岩手大学の佐藤先生と一緒にあった。二人だからこそできた暴挙もいくつかあった。旅の間中、私の気ままをお許しいただいた先生に感謝の念で一杯である。

分析センターの佐藤先生から旅の出発直前に原稿執筆の依頼を受けた。安易にお受けしたことを後悔しながら筆をとったが、はからずも長いものになってしまった。書き残したことも多々ある。いささかでも諸賢のなぐさみとなるところあらば幸いである。

1990年9月30日。



ベルリンの壁で



会談の会場のウッジ大学物理学研究所で